

ひょうご経済

TEL: 078-3621-7094
FAX: 078-3600-5511
e-mail: keizai@kobe-np.co.jp

成長続け100年企業目指す

「笑顔と断らない」が信条だ。昨秋、前任の古郡勝英会長(74)から社長室に呼ばれ、社長就任を打診された。自身に対する期待の大きさに覚悟を決め、その場で「頑張ります」と伝えた。入社33年で初めてとなる神戸勤務にも気負いはない。

半働いた。臨機応変の対応を迫られ、若かったが責任を取る経験もした。「現地スタッフとのけんかも多かったが、最後はあうんの呼吸で仕事が進んだ。い経験ができた」と振り返る。帰国後、ばら積み船の入港日に急ぎよ船積みを頼まれ、社外に頭を下げて実現した時は、涙目の荷主から「ありがとう」



トレーディア (神戸市中央区)

吉田 大介氏

ひょうご 新社長 2023

よしだ・だいすけ 駒沢大法学部卒。90年大日通運(現トレーディア)。京浜支店営業第一部長を経て、17年執行役員。20年取締役、23年6月から現職。趣味は釣り。40代までは野球やフットサルで汗を流した。神戸市中央区に単身赴任中。58歳。

災害に活用を ドームテント

加東の工房 「ラフワークマシン」



ドームテントを製作、販売するラフワークマシンの北川勝彦代表(加東市西垂水)

北川さんは富山県出身。2011年に訪ねたネパールで、生地をつなげばさまざまなものを作れる工業用ミシンの魅力に引かれた。「ミシンを踏んで、ものづくりをしたい」と帰国後、地元でテント製作・設置工房で修業した。20年春、妻の知人から紹介された加東市に家族で移住したのを機に起業した。

直径3〜7メートル 避難所などに



蓮(はず)をイメージした小型のテント(ラフワークマシン提供)

さまざまな色の布をスタンドグラスのように縫い合わせることもある。骨組みに酸化しにくく加工した鉄骨を使って耐久性を持たせ、20代で建設業に従事した経験を生かし、ニーズに応じてテントの直径を10メートル単位で変えられるという。

東日本大震災で避難所の映像を見て「被災者が過酷か」と考えた。さらに公民館などに置いて「地域の人が気軽に寄り合える場所になれば」とも。小型のテントも用意し、自治体などにPRしていくという。

◆南あわじの商業施設運営組合が破産 協同組合南淡シヨッピングセンター(南あわじ市)が、15日付で神戸地裁洲本支部から破産手続き開始決定を受けたことが30日、分かった。帝国データバンク神戸支店によると負債総額は推定約10億円。2019年に事業不振で閉店した商業施設「ららオーク」(同)の店舗を管理していた。同組合は1992年設立で、施設閉店後は事業を停止していた。

牛肉に合う日本酒

神戸灘五郷の蔵元が商「いい肉の日」の11月29日夜、大黒正宗の銘柄で知られる灘五郷の蔵元、安福又四郎商店(神戸市東灘区)は、自らの蔵の日本酒と牛肉との相性の良さをPRしようと、灘五郷酒所(同)でイベントを開いた。神戸



日本酒と肉との相性を楽しんだイベント(神戸市東灘区御影本町3、灘五郷酒所)

県内経済、緩やかに回復

日銀・中村審議委員神戸で会見

日銀の中村豊明審議委員は30日、神戸市のホテルで、兵庫県内の経済団体代表らと地域経済について意見交換した。審議委員が兵庫を訪れるのは2年ぶり。会合



意見交換後に会見する日銀の中村豊明審議委員(神戸市中央区港島中町6、神戸ポートピアホテル)

後の会見で「兵庫では一部で弱めの動きもあるが、総じて見ると緩やかに回復している」と述べた。中村氏は兵庫経済について「規模の小さな企業ほど価格転嫁が難しく、賃上げが進まないという声があった」とする一方、「水素関連など新分野への対応が進む。企業の成長に欠かせない動き」と期待を寄せた。

デザインはオリジナル、天幕も骨組みもすべて手製というドームテントの工房が、加東市にある。北川勝彦さん(43)が立ち上げた「Laugh Work Machine(ラフワークマシン)」。工業用ミシンなどで作り出す製品は、神戸で今秋開かれた「国際フロンティア産業メッセ」でも注目を集めた。販売のほか、レンタルや災害時の活用も提案していく。(大盛周平)

デザイン独自、天幕や骨組みすべて手製



蓮(はず)をイメージした小型のテント(ラフワークマシン提供)

直径3〜7メートル 避難所などに

北川さんは富山県出身。2011年に訪ねたネパールで、生地をつなげばさまざまなものを作れる工業用ミシンの魅力に引かれた。「ミシンを踏んで、ものづくりをしたい」と帰国後、地元でテント製作・設置工房で修業した。20年春、妻の知人から紹介された加東市に家族で移住したのを機に起業した。

さまざまな色の布をスタンドグラスのように縫い合わせることもある。骨組みに酸化しにくく加工した鉄骨を使って耐久性を持たせ、20代で建設業に従事した経験を生かし、ニーズに応じてテントの直径を10メートル単位で変えられるという。

東日本大震災で避難所の映像を見て「被災者が過酷か」と考えた。さらに公民館などに置いて「地域の人が気軽に寄り合える場所になれば」とも。小型のテントも用意し、自治体などにPRしていくという。

意見交換後に会見する日銀の中村豊明審議委員(神戸市中央区港島中町6、神戸ポートピアホテル)

減速を念頭にの意思決定をめぐってはない。中村氏は6人の1人で、副総裁を含む政策決定会合大規模な金融正を決めた7決定会合で、一社高まっている唯一、反対して20年の就任時製作所の副社長。意見交換には議所や経営者済み団体や行政か、但馬銀行の頭取、みなと頭一社長、県信用作田誠司会長ら席した。